

2009年1月15日

総本山仁和寺「御室桜（おむろざくら）の 第2回土壌調査」実施について

2007年4月に、「御室桜調査プロジェクト」を発足し、旧御室御所、真言宗御室派総本山仁和寺(住職：南揚道京都市右京区御室大内33)境内中門を越え左手に広がる“御室桜”(名勝)について、人の背丈にまでしか成長しない等、特異性の解明、その美しい景観を維持管理することを目的に、調査研究を行っております。前回の調査に引き続き、このたびは第2回目となる土壌調査を実施し、土壌構造に加えて、御室桜の根の様子を調査観察いたします。調査については、京都府文化財保護課及び各行政機関と協議の上、藤井英二郎教授（千葉大学）のご指導の下、住友林業グループが調査研究を行います。

■ 今回の調査内容

1. 根系および土壌調査

(1) 根系の発達に関する調査

根の成長が抑制されると、地上部の成長も抑制されると言われていることから、根系の発達状況を調査します。

調査方法は、幅60cm、長さ2m、深さ1～1.5m程度の溝を掘り、深さ10～15cmを1層として、層ごとに根を切らないように土壌を取り除き、根がどのように分布しているかを調査するとともに、層ごとに全ての根を採集し、根の長さ及び重さを測定します。

この調査結果から、土壌改良や施肥を幹からどの程度の距離および深さで行えばよいか推定できるようになります。

(2) 土壌に関する調査

前回のボーリング調査では、土壌内部の調査によりその概要把握に至りましたが、桜の根の無い土壌に限定しておりました。

今回の調査では、根に直接触れている部分の土壌調査を行うため、根の先端近くに縦、横及び深さが150cmの穴を掘り、表層から30cmごとに土壌サンプルを採取した後、三相分布（空気、水、土の割合）、物理性（硬度、透水性）および化学性（pH、EC、窒素や炭素の量）を分析する予定です。

2. 組織培養の材料となる芽の採取

対象は“御室有明（八重）”及び“御室有明（一重）”とし、組織培養の材料となる芽を1月と2月に1～2回、採取いたします。2ヶ月に渡り材料を採取するのは、材料の最適期を判断するためです。これにより、まずは一つの芽から試験管内で沢山の芽の塊（多芽体）を作り出せる条件の解明を目指します。

■ 今後の計画

1. 根系および土壌調査

(1) 根系の発達に関する調査

採取した根を全て住友林業筑波研究所に持ち帰り、3～6ヶ月をかけて根の長さとし、その発達調査を実施します。観察および測定結果から、御室桜が栄養や水を吸収している主な根が、幹からどの程度の距離および深さにあるのか、即ち根がどのように広がっているかを把握することが出来ます。

(2) 土壌に関する調査

土壌の物理性および化学性を知ることができ、上述の根の調査結果と併せることにより、効率的に土

壤改良を進めることが可能になります。

2. 御室桜クローン増殖に向けての取り組み

(1) 御室桜を後世へ引き継ぐ試み～組織培養～

“御室桜”を代々正確に受け継いでいくためには、クローン苗を育成する必要があります。通常、桜のクローン苗は、接ぎ木により増殖されますが、御室桜は樹勢の衰えも目立つことから、接ぎ木に適した枝は僅かしか採取することができません。また、屋外で育てる接ぎ木苗は、病虫害が発生した場合、枯死する危険性もあります。そこで、採取した芽を材料とした茎頂培養法によるクローン増殖による苗の育成を試行する予定です。

組織培養は、培養条件さえ開発することができれば、1つの芽からでも苗の増殖が可能な方法であり、また無菌の試験管内で増殖を行うため、病虫害による枯死の危険性もありません。また、培養液を交換していけば、半永久的に保存することが可能であり、貴重な御室桜を受け継いでいくには最適の方法と考えられます。しかしながら、御室桜に関する組織培養の事例報告はなく、一から条件を解明する必要があります。

(2) 組織培養から育成条件解明へ

多芽体誘導条件の解明には、早くても数ヶ月、特殊な条件が必要となる場合は数年かかる場合もあります。多芽体誘導後は、1.多芽体自体を増やす条件、2.沢山の芽を伸ばす条件、3.伸ばした芽を切り取り、根を生やす条件（植物体再生）、4.外の条件に順化させる条件を解明することとなり、その後育苗を行う予定です。

以上

《お問合せ先》

住友林業株式会社

コーポレート・コミュニケーション室 佐野・野澤

TEL：03-3214-2270

FAX：03-3214-2272